２０２２年４月１７日（復活日、Ｃ年）牧師メッセージ

「婦人たちはイエスの言葉を思い出した」

（ルカによる福音書 24:1-10）

司祭ヨセフ太田信三

わたしたちは今日の福音で最初の宣教者の姿を見ました。それは、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、そして他の婦人たちです。ルターは彼女たちが「十一人と他の人皆に一部始終を知らせた。」という「知らせた」を「宣教した」と翻訳しています。彼女たちが使徒たちに宣教したことに始まり、脈々と語り継がれて、ご復活の福音はわたしたちのところまで届けられています。宣教とは、彼女たち自身が経験した復活を証しすることでした。二人の天の使いは彼女たちに言いました。「ガリラヤでイエスさまが言われたことを思い出しなさい。」主イエスの言葉を思い出した婦人たちは、「そうだ、あのお言葉は本当だったのだ！イエス様は三日目に復活すると言っていたではないか！」と確信し、その「本当だ！」という確信を彼女たちは伝えたのです。この確信により、言うなれば彼女たち自身も復活を経験しました。絶望のなか、せめて遺体に香油を塗ることだけしかできなかった彼女たちが、復活を証しするものへとまったく変えられたのです。それはまさに、希望を失い、生きながら死んでいた彼女たち自身が復活の命に与った、ということです。この自分自身に起こった復活を伝えることこそ宣教なのです。

はじめの宣教者となった彼女たちのように、わたしたちもみ言葉が真実であることをこの身を持って知りたいと心から願います。主イエスのご復活。それは絶望の先に必ず希望があることを約束する出来事です。もう駄目だ、の先がある。婦人たちがそうであったように、絶望の中で、主イエスのみ言葉を思い出すなら、わたしたちも婦人たちと同じ復活の命をいただくことができます。

以前、ある教会の礼拝で「ご復活を信じている人は手を挙げてください」と質問したことがあります。結果は約半数。手を挙げることが恥ずかしい方や、当然のことを聞いてくれるな、という方もおられたとは思いますが、復活を信じる事ができない方がおられたことも真実でしょう。クリスチャンですらそうなのですから、なおさらこの世界のどれだけの人が復活を信じるでしょうか。「復活だって？」と鼻で笑われるかもしれません。しかしそうであったとしても、神が愛する御子の命を差し出してまでも伝えたかった神の思い、絶望の先の希望を受け取りたいと思います。そしてその思いを受け取り、やはり教会は確信と共に世界に宣言したいと願います。主イエスはまことに復活されました。死も、絶望も、どんなに強力な悪の力も神に勝つことはできません。心からお祝いしましょう。イースターおめでとうございます。